

インド佛教への道しるべ(五)

—戒律 佛教—

佐々木 教悟

—

佛教の聖典である経律論の三藏中、律藏 (Vinaya-pi-
taka) が阿含の經典とは異なる資料論的価値を有してい
ることについては、すでに平川彰教授によって指摘され
ているが、「律藏の研究」山喜房佛書林、昭和三五年、第一章
律藏の資料論的意義、三頁)、われわれは佛教の聖典成立史
の上で律藏が注目されるべきものであるということのほか
に、佛教の思想そのものの上から、ないしは佛教の弘通
伝持の上から律藏が重要な役割を果たしてきたことを忘れ
てはならないであろう。すなわち、佛教において僧伽が
成立して以来、その僧伽の維持のために律藏は欠くべか
らざるものであった。もちろん初期の僧伽が現存のごと
き大部の律藏を最初から有していたわけではないが、律

藏の全体を通して一貫して流れている根本の精神はゴ
タマ・ブツダによって樹立されていたのである。そして
それが佛弟子たちによってうけつがれ、佛弟子たちの生
活信条として絶対的な權威を有していたとかがえられ
る。かのサマンタパーサーディカー (Samanta-paradika
一切善見) には、尊者マハーカッサパよ。律はこれ佛
教の寿命である。律の住するあいだ教えも住するのであ
る (Pali Text p. 13) とのべられているが、これは佛教
が久しく住するためには律藏が伝持されなくてはならな
いとの見解にもとづくことばである。

おもうに、佛陀によって律 (vinaya) が説かれたのは、
佛弟子たちの生活のありかた、佛教において出家したも
のとしてのふさわしい生活の仕方を明示するにあり、そ
のことによって解脱に向ってのかれらの修道が支障なく

行なわれるようにとねがわれたからである。その観点に立てば、佛教の研究上、律の研究はおろそかにできないものである。通常われわれは律のことをいう場合に、戒律なる語を用いるが、すでにたびたび論ぜられているごとく、戒 (śīla) とは比丘個人の自発的な善き行為を指し、悪を離れんとする意志の存するものであることが注意されている。したがって戒を離れての律はあるべきでないことも容易に理解されるであろう。比丘・比丘尼の戒の条文 (śikṣāpada 学処) を集めた波羅提木叉 Paṭi-timokkha) が、波羅提木叉律儀 (patimokkha-samvara) と名づけられるゆえんもそこにある。すなわち、ここにいう律儀とは、律の学処によって、自己の行為が規制され、身業・語業の清浄がもたらされるものを指す。それゆえに比丘・比丘尼にとって波羅提木叉ほど重要なものは他になかったといっても過言ではないであろう。古来より中国や日本においてよく普及した「佛遺教経」には、ブツダの入滅后、尊重すべきものとしてこの波羅提木叉をあげ、それが比丘たちの大師であるむねが説かれている。

およそ僧伽の秩序・規則などといったようなものは、無味乾燥なもので魅力にとぼしく研究の対象とするには

あたらしいものとおもう人があるかもしれないが、佛教の教義にしても思想にしても、ただ観念的に理解するのみでは十分な把握とはいえないであろう。すなわち、修道者の実際の生活や具体的な体験をとおしてこそ教義の真髄にも触れることができるのかんがえられる。われわれは、さきに一言したところのブツダのねがいをもとめて、その立場から、現存の律蔵を可能なかぎり、あらゆる角度から調査し研究することは、佛教学研究における重要な課題の一つであるとかんがえるのである。

二

律蔵研究の資料については、平川彰教授が前述の「律蔵の研究」のなかでパーリ語資料、漢訳資料、チベット訳資料、梵語資料の四種類に大別して詳細な解説をあたえておられるから、この方面の研究をこころざすものにはまずそれを読まなくてはならない。ところで、有力な部派は、それぞれその部派独自の三蔵を編纂して伝持していたことが知られており、したがって現存の律蔵も、おのおのその所属の部派名をあきらかにすることができる。そこでいまは一応部派別にわけてそれをあげてみることにしたい。

A セイロン上座部

この部派が伝持している律蔵はパーリ語のものであるから、通常パーリ律とよばれている。

(1) Vinaya-piṭaka (律蔵)

これはスッタ・ウィハンガ (Suttavibhanga 經分別) とカンダカ (Khandhaka 犍度部) とシリヴァーラ (Parivara 附随) との三部分よりなるもので広律といわれている。その原典は H. Oldenberg: *The Vinayapitakam in Pali, one of the principal Buddhist holy scriptures in the Pali language* V vols. London 1879-83 として出版されており、和訳と英訳と独訳 (一部分) がある。内訳を示せば、次のようである。

Sutta-vibhanga 2 vols. Oldenberg, III, IV, London 1881-2; 南伝一七三; Engl. transl. I. B. Horner:

The Books of the Discipline, 5 vols. SBB, 10, 11, 13. (1938, 1940, 1942)

Khandhaka 2 vols. Oldenberg, I, II, London 1879-

80; reprint PTS, 1929-30; 南伝三〇四; Engl. transl. SBE, 13, 17, 20 (1881, 82, 85); Ger. transl. Dutroït: *Das Leben des Buddha*, s. 66-136, 1906

(一部分)

Parivāra 1 vol. Oldenberg, V, London 1883 南伝

五、

(2) Patimokkha (波羅提木叉)

これは広律に対して戒本と称せられるもので、比丘・比丘尼の戒条のみを集めたものである。したがって(1)の広律中に存するものであるが、その文献の性質上、独立して単独の、いわゆる戒経としてつたえられた。

長井真琴「巴漢和对訳戒律の根本 (比丘波羅提木叉)」丙午出版社、昭和四年、Minayeff: *Patimokkhasūtra*, St. Petersburg, Akad, 1869 (パーリ語原文にロシア語訳を附す) Dickson: *The Patimokkha*, JRAS 1875; R. D. Vadekar: *Patimokkha*, Poona, 1939

(3) Kammavācā (羯磨語本)

これは僧伽の会議あるいは儀式などにおける作法語を広律の中、すなわちカンダカの中より抜きだして集めたものである。

H. Baynes: *A Collection of Kammavācā*, JRAS, 1875, pp. 1-16; L. M. Clauson: *A New Kammavācā*, JPTS, 1906-7, pp. 1-7

(4) Samantapāsādikā (一切善見)

これは(1)のピタカ (Pitaka) に対するブッダゴーサ (Buddhaghosa 佛音(五世紀前半)のアッタカター(Aṭṭha-katha 註釈)であるが、これに相当する漢訳として僧伽跋陀羅の訳出 (A.D. 489) になる「善見律毘婆沙」十八卷(大正・二四、六七三—八〇〇)が存する。この僧伽跋陀羅 (Saṃghabhadra) はセイロン出身の学僧ともいわれている。原典の校訂出版ならびに外序の和訳がある。

J. Takakusu, M. Nagai, K. Mizuno: *Samantapāsādikā, Buddhaghosa's commentary on the Vinaya Pitaka*, 7 vols. 1924-47, 南伝六五

(5) Kankhavitaraṇi (疑心解除)

これは(2)の戒本に対するブッダゴーサのアッタカターである。

D. Maskell: *Kankhavitaraṇi Buddhaghosa's commentary on the Pāṭimokkha*, London 1956 これには相当する漢訳もなく、和訳も発表されていない。

ところでセイロン上座部系の僧伽にあっては、古来よりピタカの解釈はアッタカターによらなくてはならないという不文律の鉄則のごときものがあり、きわめてアッタカターが重要視されて現在にいたっているが、そのような態度はしたがってまたアッタカターに対するいくた

の註釈をセイロン、ビルマ、タイなどの上座部僧伽においてうみだすことになった。すなわち、ティーカー (tika 復註)、アヌティーカー (anuttika 復復註)、ヨージャーナー (yojana 文法的な解釈を主にした註釈)、アヌヨージャーナー (anuyojana 復復註) などとよばれるものがそれである。ティーカーとしてはサマンタパーサデーカーの註釈であるサーラッタデーローパニー・ティーカー (Sārattha-dīpanī-tika 真義闡明釈)、ヴィマティヴィノーダニー・ティーカー (Vimativinodanī-tika 疑惑解除釈)、カンカーヴィタラニーの註釈であるヴィナヤッタマンジュサー (Vinayathamanjūsā 律義宝函) などが存する。アヌティーカーとしてはガンティーデーパニー (Ganthidīpanī 難句闡明) が、ヨージャーナーとしてはヨージャーナーヴィナヤ (Yojanavinaya 律疏) などが知られている。これらのペーリ文献に関しては、B. C. Law: *A History of Pali Literature*, 2 vols. Calcutta 1933, ならびに M. Bode: *The Pali Literature of Burma*, London 1909, 拙稿「暹羅に於て編纂せられたる巴利語の典籍」密教文化、第九・十号などを参照するとよい。

いずれにしてもセイロン上座部佛教は、テーラヴァー

ダ・スクールとして現在もさかんにおこなわれている佛
教にして、それぞれの国の文字によるパーリ語の律典、

ならびに自国語に翻訳された律典を有しており、またそ
れらに関する綱要書・解説書・字書のたぐいも数多く出
版されている。そこでそのような諸文献を参考書として
利用するためには、セイロン語・ビルマ語・タイ語・カ
ンボジャ語などにも通ずる必要がある。とくにタイとビ
ルマとカンボジアとでは、それぞれの文字によるパーリ
三藏ならびに三藏の註釈類がまとまったかたちで刊行さ
れており、なかでもタイ国版のものには比較的誤謬や誤
植が少ないといわれているから(水野弘元「パーリ語文法」
附録(1)二三頁)、律の原典を解読するにあたっては、パ
ーリ聖典協会出版のローマ字本とタイ国出版のタイ文字
本とを対照することがのぞまれる。なおタイの僧伽で現
在用いられている模範的な律の解説書は

Sōṃḍeḍ' phrāmahā'sōmanā'cāv Krom'phrā-jā'wo'ch-
irajan'roo'rōt: Winaj' mūg' (Vinayamukha), lēm' 1, 2,
3, Mahāmac'kātrāḍ'chawidhajaalaj', Bangkok, lēm'
1, 2, 1st ed. BS. 2459, lēm' 3, 1st ed. BS. 2464
である。

三

B 法藏部

(1) 四分律六十卷佛陀耶舍共筮佛念等訳、大正二二、五
六七中——一〇一四中

漢訳の五大広律の中でも、もっとも整った内容をもっ
ているといわれているものである。

(2) 四分律比丘戒本一卷佛陀耶舍訳、大正二二、一〇一
五上——一〇二三上

(3) 四分律僧本一卷佛陀耶舍訳、大正二二、一〇二三上
——一〇三〇下

この(2)(3)に関しては、西本龍山著「四分律比丘戒本講
讃」(東本願寺安居事務所、昭和三〇年)がある。

(4) 四分比丘尼戒本一卷 佛陀耶舍訳、大正二二、一〇
三一上——一〇四一上

(5) 曇無德律部雜羯磨一卷 康僧鑑訳、大正二二、一〇
四一上——一〇五一中

(6) 羯磨一卷 曇諦訳、大正二二、一〇五一中——一〇
六五中

(7) 四分比丘尼羯磨法一卷 求那跋摩訳大正二二、一〇
六五中——一〇七二上

さて四分律の註釈とみなされているものに

(8) 毘尼母經八卷、失訳人名、大正二四、八〇一上——

八五〇下

があるが、これが実際に法藏部所属のものであったかどうかについては定説がない。赤沼智善教授はこの文献と四分律とのあいだにふかい関係があることを例証して、これは四分律の註釈であるむねを論ぜられている（『佛教經典史論』二六頁）。しかしながら金倉円照教授は、この毘尼母經を雪山部所属とされている（『毘尼母經と雪山部』日本佛教学会年報、第二五号二二九頁以下）。

四分律に対する註釈が数多くつくられて、その研究と実践がなされたのは中国においてであるが、とくに六世紀のころよりその研究がさかんとなって（『佛敎史概説中國篇』平樂寺書店刊、八七頁）、南山宗の祖といわれる道宣（596—657）が出るにおよんで四分律宗（律宗）の基礎が樹立された。かれの四分律行事鈔、十二卷と四分律含註戒本疏八卷と四分律刪補隨機羯磨疏八卷とは律の三大部とよばれている。中国において編纂された四分律に関する文献は、徳田明本編「律宗文献目録」（芳村修基編「佛敎敎團の研究」附録）にあつめられている。

C 化地部

(1) 弥沙塞部和醯五分律三十卷佛陀什共道生等訳、大正

二二、一上——一九四中、

(2) 弥沙塞五分戒本一卷、佛陀什等訳、大正二二、一九

四下——二〇〇中、

(3) 五分戒本一卷、同右異本、大正二二、二〇〇中——

二〇六中

(4) 五分比丘尼戒本、一卷、明徴集、大正二二、二〇六

中——二一四上

(5) 弥沙塞羯磨本、一卷、愛同録、大正二二、二一四上

——二二六上

四

D 説一切有部

サンスクリットの律藏はパーリ律藏や漢訳律藏のよう
な、まとまったかたちの広律は現存せず、戒本を除いて
他はすべて断片のみが発見されている。そしてその部派
所属は説一切有部と後にあげる根本説一切有部に関する
ものである。その他はただ僅かに大衆部のものともみられ
る一葉の断片が発見されているにすぎない。このような
サンスクリットの資料に関しては、山田龍城著「梵語佛
典の諸文献」（平樂寺書店刊）五六頁以下、ならびに平川

彰著「律蔵の研究」七三頁以下に解説がなされている。いまは平川教授のあげておられるものを、すこしく順序をかえて列挙することにする。

(1) 広律断片、三八葉

Valentina Rosen : Der Vinayavibhanga zum Bhikṣupratimokṣa der Sarvastivādin, — Sanskrit-fragmente nebst einer Analyse der chinesischen Übersetzung. — Berlin, 1959

三八葉中一葉のみは根本説一切有部律の波羅夷法「殺戒」の説明中に相当文がみられるとごわればよい。

(2) 犍度部「受具足戒法」の断片、三葉

M. L. Fragments du Vinaya Sanskrit, JA. 1911, pp. 619-625

(3) 犍度部「七法」中の断片、二葉

M. L. Finot : Le Prātimokṣasūtra des Sarvastivādin, Texte Sanskrit (avec la version chinoise de Kumārajīva traduite en Français par Édouard Huber) JA. novembre-décembre 1913, PP. 415-547
このフイノリの校訂出版の末尾に掲載されている。

(4) Prātimokṣasūtra (波羅提木叉經)

これは③のフイノリにあげたフイノリの校訂出版である。

り、首尾に欠損はあるが、梵本としてまとまったかたちのものである。これには増田臣也著「梵文波羅提木叉經」(中山書房、昭和四四年)があり、和訳がつけられている。

(5) 「波逸提法」点浄字処の断片、一葉

これは③と同くフイノリの校訂出版の末尾に掲載されている。

(6) 「衆学法」と「受具足戒法」の断片、數葉

Jean Filliozat et Horyū Kuno : Fragments du Vinaya des Sarvastivādin, JA. janvier-mars, 1938, pp. 21-64

(7) 比丘尼戒經の断片、二〇葉

E. Waldschmidt : Bruchstücke des Bhikṣuṇī-prātimokṣa der Überlieferung des Sarvastivādin mit einer Darstellung verschiedener Schulen, Leipzig, 1929

(8) 比丘尼戒經「僧殘法」の断片、一葉

これは③と同くフイノリ校訂出版の末尾に掲載されている。

(9) Karmavācānā (羯磨本) 一〇五面

Herbert Härtel : Karmavācānā — Formulare für

den Gebrauch im buddhistischen Gemeindeleben

aus ostturkistanischen Sanskrit-Handschriften —
Berlin, 1956

つぎに漢訳およびその註釈とみられるものをあげてみよう。

- (10) 十誦律六十一卷 弗若多羅訳、大正二三、一上—四七〇中、
- (11) 十誦比丘波羅提木叉戒本一卷鳩摩羅什訳、大正二三、四七〇中—四七九上
- (12) 十誦比丘尼波羅提木叉戒本一卷法顯集出、大正二三、四七九上—四八八中
- (13) 敦煌出土十誦比丘尼戒本一卷鳩摩羅什訳？
- (14) 大沙門百一羯磨法一卷失訳、大正二三、四八九上—四九五下
- (15) 十誦羯磨比丘要用一卷僧瓔撰出、大正二三、四九六上—五〇三下
- (16) 薩婆多毘尼毘婆沙九卷失訳、大正二三、五〇三下これは十誦律の戒条を解釈したもので、中国では「薩婆多論」ともよばれて、ひろく用いられたといわれている。
- (17) 薩婆多部毘尼摩得勒伽十卷僧伽跋摩訳大正二三、

五六四下

これは十誦律の戒条および鍵度の持犯問答をなしたものであるが、本書に關係する梵文の断片(三葉)がカシュガル附近において発見され、ヘルンレによって、その研究成果が発表されている。A. F. Rudolf Hoernle: Vinaya Textes, I. Monastic Regulations 2. Monastic Regulations 3. Technical Terms (Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan facsimils with transcripts translations and notes edited in conjunction with other scholars, Oxford, 1916, pp. 4-16)。なお十誦律以前の訳出で、現存漢訳律典中、最古訳とみられているものに、「鼻奈耶」十卷笠佛念訳(大正二四、八五一—八九四)があり、十誦律と同系統のものとされているから、有部もしくは有部に近い部派の伝持とかがえられる。その他に敦煌本の「戒經」一卷(矢吹慶輝「鳴沙余韻」三九—四一枚)があるが、これも有部系のものとされている。

E 大衆部

(1) 僧祇律梵文断片、一葉

S. Lévi: Note sur des manuscrits sanscrits pro-

venant de Bamīyan (Afghanistan), et de Gilgit (Cachemire), JA. 1932, pp.1-13

れは僧祇律卷二十四の「発喜羯磨」の説明の箇処にあたるものである。

(2) 摩訶僧祇律四十卷佛陀跋陀羅共法頌訳、大正二二、一上—五四九上

(3) 摩訶僧祇律大比丘戒本一卷佛陀跋陀羅訳大正二二、五四九上—五五六上

(4) 摩訶僧祇比丘尼戒本一卷法頌共覺賢訳、大正二二、五五六上—五五六下

F 飲光部

(1) 解脱戒經一卷般若流支訳大正二四、六五九上—六六五中

G 正量部

(1) 律二十二明了論一卷真諦訳大正二四、六六五中—六七三上

H 根本説一切有部

(1) 根本有部律の梵文断片、数葉

Vinayavastu (律事) 中の第一 Pravrajā-vastu

(出家事)の末尾から第二 Posadha-vastu (布薩事)の初めの部分にあたるもの(断片第五)。その他断片の第

一、二、三はこの部派所属のものであることが学者によつてあきらかにされている。この梵文断片の報告は、前掲E(1)のレヴィ教授の論文においてなされている。

(2) 根本有部律の梵本四二三枚

これはギルギット写本とよばれているもので、すべて Vinayavastu に属するものである。

Nalinaksha Dutt: Gilgit Manuscripts, Vol III part 1, 2, 3, 4, 1942-50, Srinagar & Calcutta

(3) Prātimokṣasūtra (戒經)

これはギルギット写本にもとづいてハネルジーが公刊したものである。A. Banerjee: Prātimokṣasūtram

(Mūlasarvāstivāda), IHQ, 1953-54

(4) Bhikkukarmavākya (比丘羯磨本)

これもギルギット写本にもとづいてハネルジーが公刊したものである。IHQ, 1949, pp. 19-30

(5) 根本説一切有部毘奈耶頌三卷義浄訳大正二四、六一七中—六五七中

(6) 根本薩多部律撰十四卷義浄訳大正二四、五二五上—六一七上

(7) 根本説一切有部毘奈耶藥事十八卷義浄訳、大正二四、一上—九七上。

- (8) 根本説一切有部毘奈耶羯恥那衣事一卷義浄訳、大正二四、九七中——九九上、
- (9) 根本説一切有部破僧事二十卷義浄訳大正二四、九上——二〇六上
- (10) 根本説一切有部毘奈耶雜事四十卷義浄訳大正二四、二〇七上——四一四中
- (11) 根本説一切有部尼陀那目得迦十卷義浄訳大正二四、四一五上——四五五下、
- (12) 根本説一切有部毘奈耶尼陀那目得迦撰頌一卷義浄訳、大正二四、五一七下——五二〇中、
- (13) 根本説一切有部略毘奈耶雜事撰頌一卷義浄訳、大正二四、五二〇下——五二四上、
- (14) 根本説一切有部戒經一卷義浄訳、大正二四、五〇〇中——五〇八上
- (15) 根本説一切有部苾芻尼戒經一卷義浄訳大正二四、五〇八上——五一七中
- (16) 根本説一切有部百一羯磨十卷義浄訳大正二四、四五下——五〇〇中
- 以上の(5)以下(16)にいたるものが現存の漢訳にして大正藏経中におさめてあるものであるが、この部派所属のものがすべて義浄の訳出になるものであること、そし

てつぎにかかけるところのチベット訳としてつたえられているものはすべてこの部派伝持のものであることが注目される。

- (17) Hdul-ba gshi Vinayavastu 律事 Otani No. 1030
- (18) Hdul-ba phran-tshegs-kyi gshi, Vinayaksudra-ka-vastu 律雜事 Otani No. 1035
- (19) Hdul-ba gshun bla-ma, Vinaya-uttara-grantha 無上戒律科 Otani No. 1036, 1037 二本あり、No. 1037 が完全なものである。
- (20) So-sor thar-pahi mdo, Prātimokṣa-sūtra 波羅提木叉經 Otani No. 1031; 増田臣也著「西藏文波羅提木叉経」(中山書房昭和四四年)はこれの校訂和訳である。
- (21) Hdul-ba mam-par hbyed-pa, Vinaya vibhāṅga 律分別 Otani No. 1032 これは比丘波羅提木叉の註である。
- (22) Dge-slon-mahi so-sor thar-pahi mdo, Bhiṅṣuṇi-prātimokṣa-sūtra 比丘尼波羅提木叉經 Otani No. 1033
- (23) Dge-slon-mahi hdul-ba nam-par hbyed-pa, Bhiṅṣuṇi-vinaya-vibhāṅga, 比丘尼律分別 Otani No. 1034

これは比丘尼波羅提木叉經の註である。

以上はチベット大藏經の甘殊爾部(經部)におさめられていたものであるが、丹殊爾部(論部)にも犍度部の註、波羅提木叉の註、羯磨本その他の解説書など数多くの律典が存する。その中には、前掲(6)に比定せられる Hdui-ba bsdus-pa, vinaya-saṅgraha (律撰) Otani No. 5606 など注目すべきものもあるが、紙数の都合でいまは省略することにする。

最後に根本有部系統の資料として逸することのできない「翻訳名義集」(Mahavyutpatti) をあげておかねばならない。これは九世紀に成立したものとわかれており、サンスクリットのほかに漢訳、チベット訳、モンゴル訳を対照しているが、この中に律の名目や戒經の要項が列挙されている。ところで本書はただたんに戒律研究の資料たるにとどまらず、佛教術語の字書として、佛教学研究上貴重な文献ということが出来る。チベット大藏經におけるものは Otani No. 5832 Bye-brag-tu rtags-por byed-pa である。なおこの「翻訳名義集」は久しく入手困難であったが、幸いに先年鈴木学術財団によって複製せられた。

梵藏漢和
四訳対校
「梵藏漢和翻訳名義大集」(京都大学榊版)

第一卷梵藏漢和四訳対校

第二卷梵藏索引

昭和三十七年刊

六

上にあげたような諸種の律典は、各部派の僧伽すなわち教団の実際のありかた、教団構成員の生活形態を物語る資料でもある。そこでこれらの資料にもとづいて、原始佛教の教団、部派佛教の教団に関する研究が発表されている。代表的なものとしては、佐藤密雄著「原始佛教教団の研究」(山喜房佛書林、昭和三八年)や、平川彰著「原始佛教の研究」(春秋社、昭和三九年)があるが、塚本啓祥著「初期佛教教団の研究」(山喜房佛書林、昭和四一年)は、《僧伽の抗争》から《教団における伝法の形態》にまで関説した注目すべき研究である。セイロンにおける上座部に関して早島鏡正著「初期佛教と社会生活」(岩波書店、昭和三九年)があり、インド、中国、日本を通じてのものとしては、芳村修基編「佛教教団の研究」(百華苑、昭和四三年)が公刊されている。とくに後者にはビルマにおける上座部佛教の教団の構造がとりあげられていて、比丘の修道生活の実態が報告されている。また純学術書ではないが、石井米雄著「戒律の救い・小

乗佛教」(世界の宗教 8、淡交社 昭和四四年)はタイにおける上座部佛教の実態が体験をとおして平易に書かれていて魅力あるものとなっている。根本説一切有部の佛教に關しては、義淨の「南海寄帰内法伝」四卷(大正五四、二〇四下—二三四上)があるが、その解説書として筆者の「南海寄帰伝講要」(東本願寺出版部 昭和四三年)がある。

本稿の最初に一言したように、波羅提木叉は道を求めるものにとっては大師とせらるべきものであった。そしてわれわれは、学問をする立場に立つかぎり、あくまで科学的な方法で厳密な対照研究もなされなくてはならない。この方面のものとしては赤沼智善「戒律の研究」(「佛敎聖典史論」所載)がある。またその評価には異論があるところでは、W. Pachow: A Comparative study of the Prātimokṣa, Santiniketan, India, 1955 もその種の代表的な成果であろう。さらに諸律の犍度部の比較を

行なった E. Frauwallner: The earliest Vinaya and the beginning of Buddhist literature, Rome 1956, pp. 68-129 も注目すべき労作である。しかしながら、佛教は人類を問題とし、民族をかんがえ、人間を問う宗教である。そこで、佛教は人類の発展と調和に對して、人間の福祉に對して、いかなるはたらきをなしてきたか、またなしつつあるかがつねに問われなくてはならない。そのことがまた、人類の未來に對する佛教のはたす役割をあきらかにすることにもなるとおもわれる。その意味で、エール大学でたされた Manning Nash etc.: Anthropological Studies in Theravada Buddhism, (Cultural Report Series No. 13) Southeast Asia Studies, Yale University 1966 の論文論集は、現代的な意味をもつユニークなものとらうてよからう。